

平成18年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成18年6月12日
静岡県病害虫防除所長

対象病害虫名 タバココナジラミ バイオタイプQ *Bemisia tabaci* Q-biotype
対象作物 トマト、ミニトマト、ポインセチア

1 発生経過

- (1) 平成18年1月及び2月に、県内各地の野菜及び花卉の施設内におけるコナジラミ類の発生調査を実施した。
- (2) 採集したコナジラミ類について遺伝子診断を実施した。また、採集したコナジラミ類の一部を、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所に検定を依頼した。その結果、県東部のポインセチア、県中部の市場流通していないトマトで、タバココナジラミ バイオタイプQの発生が確認された。
- (3) タバココナジラミ バイオタイプQは、1996年にスペインで初めて確認され、その後、イタリアやイスラエル、中国等で確認されている。
- (4) 日本では、平成17年2月に宮崎県で初めてタバココナジラミ バイオタイプQの発生が確認された。その後、発生が拡大し、現在までに25都府県で発生が確認されている。

2 形態および生態

(1) 形態

タバココナジラミ バイオタイプQは、これまでに確認されたタバココナジラミ バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）との形態上の差異は、成・幼虫ともに認められていない。このため、両種の肉眼での識別は不可能である。現在のところ、両種の識別方法は遺伝子診断のみである。

バイオタイプとは、形態上ほとんど区別できないが、遺伝子型、植物への寄生性等の生物学的性質が異なる系統のことを言う。

(2) 生態

他県からの報告によると、本種は、一部の薬剤で感受性の低下が確認され、また、タバココナジラミ バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）の寄生が少ないピーマンやシシトウへの寄生が認められている。

3 寄主植物

これまでに他の都府県で寄生が確認されている植物は、以下の通りである。

ナス科：トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、シシトウ	
ウリ科：キュウリ、メロン	シソ科：シソ、セージ
ユリ科：アスパラガス	ヒルガオ科：カンショ
トウダイグサ科：ポインセチア	アブラナ科：茎ブロッコリー
キク科：ガーベラ	アカネ科：ブーバルディア

4 被害

- (1) オンシツコナジラミやタバココナジラミ バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）と同様、成幼虫の吸汁による生育阻害、分泌物と分泌物に発生するすす病による葉や果実の汚れ等が問題となる。
- (2) タバココナジラミ バイオタイプB（シルバーリーフコナジラミ）と同様、トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を媒介する。

5 防除法

- (1) 他県では、チアメトキサム、イミダクロプリド、クロチアニジン、チアクロプリド（ネオニコチノイド剤）やエトフェンプロックス（合成ピレスロイド）、トルフェンピラド（その他系）、ピリプロキシフェンに対する感受性の低下が報告されている。しかし、防除薬剤に対する感受性は地域によって異なるため、本県での実態は不明である。従って、薬剤散布を行う場合は、有効薬剤に対する抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。
- (2) 施設開口部には 0.4mm 目合いの防虫ネットを設置し、施設内への侵入を防ぐ。
- (3) 施設内部及びほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
- (4) 作物残渣は、土中に埋めるかビニール等で覆って処分する。
- (5) 作付け終了時には、施設を閉鎖して蒸し込みを行い、野外への飛散を防ぐ。

6 その他

- (1) トマト黄化葉巻病の発生地域では、本病の発生拡大が懸念されるため、注意が必要である。
- (2) 薬剤が効かない等の疑わしいコナジラミ類が発生している場合は、病虫害防除所、農業試験場、農林事務所、農協に問い合わせる。